

イランどう見る

大統領選後の混乱が続くイラン。保守派アフマディネジャド大統領の「圧勝」という結果に、ムサビ元首相ら改革派が異議を申し立てる格好になっている。だが、底流にあるのはイスラム革命から30年が経過し、鮮明になってきた保守、改革両派の路線の違いだ。その動向に詳しい日本のイラン専門家に、現状を分析してもらった。

革命後のイランの動き

79・2 (年・月) ホメイニ師が亡命先のパリから帰国。革命政府を樹立し、親米の王政を打倒



11 米国大使館占拠人質事件(～81年1月)

80・4 米国がイランと国交を断絶
9 イラン・イラク戦争(～88年8月)



89・6 ホメイニ師死去、ハメネイ師が最高指導者に就任
97・5 改革派のハタミ師が大統領選で圧勝

99・7 保守派の言論弾圧に抗議する改革派学生の大規模デモ

02・1 ブッシュ米大統領がイランを含む3国を「悪の枢軸」と名指し

03・12 反体制の人権活動家シリン・エバディ氏がノーベル平和賞受賞

05・6 保守強硬派のアフマディネジャド氏が大統領に当選

06・12 国連安全保障理事会がイランに核開発停止を求めて制裁を決議(07年3月、08年3月にも制裁を決議)

09・1 米国にオバマ政権誕生
6 アフマディネジャド大統領再選



まつなが・やすゆき
福岡市生まれ。米ニューヨーク大博士課程修了(政治学)。日本大助教などを経て08年4月から現職。45歳。

改革派の源流は、79年のイスラム革命直後にできた「イスラム共和党」の左派だ。ムサビ氏は首相、ハタミ元大統領は大統領として当時、左派に属していた。左派は社会正義に重きを置き、福祉を厚くする「大きな政府」指向。反米、反イスラエルでもあり、イスラム革命思想の輸出も目

東京外大准教授

松永泰行さん

指した強硬な面を持つ。一方で、保守派の源流は同じ共和党の右派にある。自由経済指向で伝統やイスラーム的なものをより重視。現在の最高指導者ハメネイ師は当

体制内改革路線、尻すぼみ

時、右派だった。

革命当初、どちらかと言えば左派寄りだった最高指導者ホメイニ師をバックに、ムサビ氏は首相としてイラン・イラク戦争(80～88年)時代に権勢をふるった。統制経済を敷き、市民の自由が少ない抑圧的な政治をした。

「自由のないムサビの時代はもう嫌だ」と思ったはずだ。これは改革派に人材がいなかったの表れでもある。

改革派には組織力もない。共和党が解党した翌88年、左派の、闘う聖職者集団(MRM)が結成されたが特権階級の聖職者だけが党員で、わずか30人程度。普通の政党らしい活動もしてこなかった。ハタミ政権下にはイランイスラム参加戦線(IIRF)もできたが、これも単なる頭脳集団だ。しかも政治勢力は分

裂。MRMの中心メンバーだったキヤルビ師は国民信託党を結成し、今回の大統領選にも出馬したため、改革派は候補者の一本化に失敗した。

改革派支持の市民との間にも意識のずれがある。選挙後に十数万人もがデモをしたと伝えられたが、これは「窮屈なイスラム革命体制は嫌だ」という意識を持った「嫌」体制の人々だ。改革派はそこまで求めてはいない。

ムサビ氏の声明をよく読むと、「継続せよ」と言っているのは、あくまで「社会正義実現のための社会運動」であって、「反イスラム体制運動」ではない。自制も強調し

ただ、保守派内にも対立があり、権力闘争が始まるだろう。革命防衛隊は政財界に人材を送り込み、確実に基盤を築いている。大統領は年長の聖職者も敬わない。数年後に「聖職者支配を打破する」と宣言し、軍国主義の道を歩み始める可能性も否定できない。(聞き手・前川浩之)

「私の名の下に死なないでほしい」とも言っている。保守派は、そういう改革派の限界を見抜いている。改革派のデモは、ガス抜きでやらせていたと思われる。

今は、ハメネイ師とアフマディネジャド大統領という保守派の絶頂期なのだ。保守派の完全な計画勝ちで、体制内の改革路線は尻すぼみだ。結局のところ、改革派は国民を失望させただけだと思う。2期目の政権は、いよいよ自信を深めるだろう。

「私の名の下に死なないでほしい」とも言っている。保守派は、そういう改革派の限界を見抜いている。改革派のデモは、ガス抜きでやらせていたと思われる。